

2021年9月26日 主日礼拝

説教題「主の山に、備えあり」創世記 22 章 14 節、マタイ 7 章 7～12 節

主任牧師 加藤 誠

「アブラハムはその場所をヤーウェ・イルエ(主は備えてくださる)と名付けた。そこで人々は今日でも『主の山に、備えあり』と言っている」(創世記 22 章 14 節)。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」(マタイ 7 章 7 節)

信仰は「見えない神に心のチャンネルを合わせていくこと」です。けれども見えない神を大切にすることはなんと難しいことでしょうか。「信仰は見えない神を相手にする生活であり、見えない部分で時間や犠牲をどれだけささげられているかが非常に大切だ」と言う主旨の話を知ったことがあります。私たちは「隠れた神」を大切にするよりも目に見えるものを追いかけて一日を過ごしているところがないでしょうか。オンライン礼拝になって、いつでも自分の都合の良い時につながればいいと、いつの間にか神さまとのつながりを後回しにしていないでしょうか。「お腹がすいた」と言って食卓につく以上に、「神さまの御言葉を聞きたい」と聖書の前に静まる時間を大切に求める…。そういう信仰をいただいきたいのです。

荒木和子さんが先週の主の日 9 月 19 日に天に召されました。79 歳のご生涯でした。三番目のお子さんがあけぼの幼稚園に入園したことがきっかけで初めて聖書と賛美歌を手にした荒木さんでした。第一礼拝を通して間もなくバプテスマを希望されるようになりましたが、ご家族の理解がなかなか得られず、約 10 年間、その時を待たれました。それでも、主日礼拝を休むことがなかったと聞きました。そして 1990 年、神さまが備えられた「時」に 48 歳でバプテスマを受けられました。

この夏の 8 月 18 日、長女の由紀さんが和子さんを新しい礼拝堂と一緒に連れて来てくださり、礼拝堂の一番前の長椅子に座ってエゼキエル書 47 章と一緒に開き共に祈らせていただきました。「9 月になって緊急事態宣言が解除されたら、早く皆さんと礼拝をおささげしたいですね」とお話ししたのですが、残念ながら神さまは別のご計画をお持ちでした。その後 9 月初旬に入所された緩和ケア施設にお見舞いした際、「荒木さんの愛唱聖句はどの箇所ですか？」とお尋ねすると間髪入れずに「主の山に、備えあり」と答えられました。「賛美歌はたくさんあります。でも特に『罪ゆるされしこの身をば』です」とも。イザヤ 54 章 10 節を読んで祈らせていただくと、「わたしも祈ります」と和子さんが酸素マスクを外して祈り始められました。「神さま、小さく弱い私ですけれど、神様を信じて従い、たくさんのお恵みをいただきました。ありがとうございます。皆様のお祈りをありがとうございます。神さまの栄光がほめたたえられますように。アーメン」。相当に呼吸が苦しい中で、祈り終えられた荒木さんの顔は光輝いていました。神さまの愛をまっすぐに両手いっぱいを受けて歩いてこられた和子さんの信仰がそこに見えるようでした。

家族葬の前日の「お別れの時」、仕事帰りに駆けつけて来られた幼稚園の保護者

がおられました。「二年前の荒木先生のバイブルクラスがとても楽しかったんです。荒木先生が私たちのどんな発言や質問も優しく受け止めてくださって、皆さん自由闊達に語り合うことができ、とても民主的で、今でもそのクラスのお母さんたちとは大切につながっていて荒木先生に感謝しています」と。ご自身が信仰をいただくきっかけになった幼稚園のバイブルクラスと第一礼拝での奉仕を大切にし、お母さんたち一人ひとりとの出会いを大切にされた荒木さんでした。

今朝の聖書箇所である創世記 22 章「主の山に、備えあり」と、マタイの「求めなさい。そうすれば、与えられる」は、荒木さんの愛唱聖句ですが、この二つを並べて読みながら、「なるほど」と改めて考えさせられたことがあります。というのはこの二つの聖句の順番です。「主の山に、備えがある」から、「求めなさい」なのであって、「求めなさい」そうすれば「主の山に、備えあり」ではないということです。私たち一人ひとりに一番必要なものを、主はすでに用意してくださっている。それだから「求め、捜し、たたきなさい」と招かれているのです。

「主の山に、備えあり」というと、「食べるもの、着るもの」など、いろいろ生活に必要なものが神さまによって用意されているイメージを持つわけですが、創世記 22 章で「一人息子であるイサクをささげなさい」と言われたアブラハムに用意されていたのは、イサクの代わりに小羊でした。小羊とは罪の赦しの象徴です。新約ではイエス・キリストの十字架です。アブラハムに一番必要なもの、無くてならないもの。それは罪の赦しであり、そのための小羊を主は用意してくださっていた。それが「主の山に、備えあり」の意味です。

アブラハムとサラ夫妻はイサクを与えられる前に、跡継ぎの男の子が生まれないので、女奴隷ハガルを通してイシュマエルという息子をえます。けれどもイサクが生まれた途端、イシュマエルの存在が目障りとなり、母親のハガルと共に荒れ野に追い出します。それは「消えてくれ」という宣言です。何という身勝手な罪でしょうか。その直後にアブラハムは「せっかく与えられた一人息子であるイサクをささげよ！」という神の命令を聞き、愕然としたはずですが。祝福のしるしであるイサクをなぜささげなければならないのか。「神さま、あまりに理不尽ではないですか！」という叫びが沸き起こる中で、アブラハムは自分たち夫婦がハガルにした理不尽を思い知らされ、荒れ野で泣き叫ぶハガルの涙が迫ってきたことでしょうか。アブラハムは如何ともしがたい、消すに消せない、自らのどす黒い罪と向かい合わされたのです。しかし主なる神はそのアブラハムを赦し、大いなる恵みで彼を包みます。アブラハムの罪を引き受ける小羊を用意してくださっていたのでした。これが「主の山に、備えあり」の意味です。「食べるもの、着るもの」どころではない。神のまったき赦し、キリストの十字架の恵みによって私たちは「生きよ！」と招かれている。だからこそ「求めよ、捜せ、たたけ」。神によって「与えられ、見だし、開かれる」恵みを体験していきなさい。荒木和子さんを最期まで生かされたこの神の恵みを大切に受け取っていききたいのです。